

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

先住民族からみた「世界遺産」：
「紅河ハニ棚田群の文化的景観」の世界遺産登録を
めぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 朋恒 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006061

第5章 先住民族からみた「世界遺産」

—「紅河ハニ棚田群の文化的景観」の世界遺産登録をめぐる—

阿部 朋恒

首都大学東京

2013年6月にプノンペンで開催された第37回世界遺産委員会において、雲南省南部の哀牢山脈に広がる「紅河ハニ棚田群の文化的景観 (Cultural Landscape of Honghe Hani Rice Terraces)」の世界遺産登録が決定した。わたしはこの喜ぶべき一報を、世界遺産指定地域から50kmほど離れたハニ族の村落で手にしたが、その時点では登録決定の事実はおろか、世界遺産とは何かを知る村人にすら誰一人として出会わなかった。本稿では、そこで事態を説明する役割を担った私自身を巻き込む対話を通じて形成された、ハニ族の村落コミュニティにおけるローカルな「世界遺産」認識の一例を紹介し、さらにそこから浮かび上がる論点として、ハニ族が自らの文化をどのように概念化しているのかを検討する。

近年の中国では、文化遺産の制度的認定を求める機運がますます高まりつつある。それに呼応して学界においても文化の資源化をめぐる議論が活発に行われおり、紅河ハニ棚田の世界遺産登録もまた、地元出身の文化研究者たちが現地政府に働きかけて声高に主導してきた申請運動が実を結んだものであった。したがって、世界遺産委員会の認めるところとなったハニ族の文化とは、少なからず政治的な戦略のもとで描かれてきた文化像を下敷きにしたものにはかならず、そこから棚田に暮らすハニ族の今日的な村落生活をうかがうことは難しい。本稿では、世界遺産登録を契機として際限なく拡散されつつあるこうした「ハニ族文化」と、ハニ族が語る自らの「文化」のすれ違いについて具体的に検討していく。

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 はじめに | 3 ハニ族による「文化」をめぐる語り |
| 2 「文化的景観」とハニ族文化 | 4 おわりに |

キーワード: 世界遺産、文化的景観、ハニ族、棚田、紅河

1 はじめに

2.1 世界遺産登録のニュース

2013年6月16～27日にプノンペンで開催された第37回世界遺産委員会において、雲南省南部の哀牢山脈に広がる「紅河ハニ棚田群の文化的景観 (Cultural Landscape of Honghe Hani Rice Terraces)」(以下、紅河ハニ棚田と略記)の世界遺産登録が承認された¹⁾。わたしはこの喜ぶべき一報を、当該遺産の指定地域から50kmほど離れたところにあるハニ族の村落で手にした。中国で「ハニ族 (哈尼族)」と呼ばれている集団は、中国雲南省のみ

ならず、タイ、ミャンマー、ラオス、ベトナムにまたがって分布しているが、ベトナムを除く東南アジアでは一般にアカ族としても知られている。ハニ族・アカ族の多くは山岳地域に田地を拓いて農耕を営んでおり、わたしが2013年4月から2015年1月にかけて滞在した雲南省紅河ハニ族イ族自治州紅河県のT村も、やはり見渡す限りの森林と棚田に囲まれていた。



写真1 T村遠景



写真2 T村内観



写真3 儀礼後の直会の様子

いまや情報通信網が世界をほとんど余すところなく覆う時代であり、奥深い山間に建つT村でも、携帯電話を通じてオンタイムのニュースが手に入る。紅河ハニ棚田の世界遺産登録の知らせは、スマートフォンで閲覧した新聞社のウェブサイトにも、日本語版ニュースとして掲載されていたものである。その日はちょうど村を挙げての儀礼が行われる日だったので、直会の席でさっそく吹聴してまわったが、この時点では登録成功の事実はおろか、世界遺産とは何かを知っている村人にすら誰ひとりとして出会わず、それは一体どういうことなのだと質問攻めにあうことになった。

このとき、わたしの口をついて出てきたのは、〈遺産〉や〈景観²⁾などハニ語にそのまま置き換えることが難しい漢語語彙ばかりであり、漢語としても農村における日常的な経験からは遠いため、同席していた村の男たちにもなじみの薄いもののようなものであった³⁾。そこで、わたしがハニ語と漢語の言葉を尽くして世界遺産について知るところを披露し、

その場にいる皆でこれを解釈していくという共同作業がはじまったのである。酒とご馳走の並ぶ場の勢いも手伝って、口に泡を飛ばしながらの言い合いがまさに延々と続いた後、そこにはおおむね次のような共通認識が出来上がっていた。

「祖先の水田がきれいだ、ハニの“ヨリ”がよいと、外の外国人がそのように言っている (Aqpyuq aqbol e xaldei fuqzha, haqniq yolil meeq, laqnil e Waqgo col xilmei lei eil.)」⁴⁾。

1.2 一年のあいだの変化

上述の一文には、われわれが思い浮かべるそれとはやや異なる言葉づかいで世界遺産が描かれていることがお分かりいただけると思う。ひとつだけ翻訳を保留しておいた“ヨリ”については本稿の後半であらためて論じるが、ここではひとまず「文化」として理解しておきたい。日々丹精込めて耕している棚田と、自らの“ヨリ”に関心が寄せられていることについてはみな大いに満足していたものの、この時点では「外の外国人がそのように言っている」だけのことに過ぎず、まさに他人事といった様子でもあった。

しかし、それからほんの一年が過ぎる頃には、〈世界遺産〉の話題は村のなかで定番といえるほどになっていた。世界遺産登録を引きがねとして、尾根を2つ越えた一帯で観光開発のための建設ラッシュがはじまっており、そこで出稼ぎをしてきた男たちがさまざまな話題を持ち帰ってきたためである。いわく、ボドゥ（竹の節をくりぬいた煙草用水パイプ）くらい長いカメラを抱えた漢族がうろうろしている、本物の（つまりわたしと違って金髪の）外国人を見たなど見慣れぬ旅行者の目撃談も多いが、もっとも熱心に語られるのは、そうした人を家に泊めると100元ほども礼をくれるらしいといった、金銭の絡む話であった。とりわけ、米の収穫が終わってしばらくした頃、わたしが所用で街に出た折に買ってきた土産物用の赤米（在来品種のコメ）に1キロで75元という値段がつけられていたことは、少なからぬ驚きをもって迎えられた。赤米そのものはこの村でも作っているが、近年は手間のかからない品種改良米の作付けの方が圧倒的に多くなっている。その廃れつつある赤米が、近くの定期市で売るときの、実に25倍以上にもなる法外な値で売られていたのである。

かくして、世界遺産は単なる他人ごとであることをやめ、経済的な利益を生む可能性のある資源としての意味をもつ言葉となっていった。それはもちろん、World Heritageないし漢語で表現される〈世界遺産〉の辞書的な意味が理解されたということではないし、世界遺産センターが認めた「紅河ハニ棚田群の文化的景観」へのまなざしが、T村の人々に共有されたわけでもない。出稼ぎを通じて村落観光のためのインフラ整備が進む現場を見てきた男たちは、わざわざ茅葺き屋根へとふき替えた家屋を時代錯誤で火事のもとになるだけだと一蹴し、儀礼用のブランコを広場に一年中出しっぱなしにして見せ物にするなど馬鹿げているとけなす。話は決まって、政府の投資によって石畳の道が敷設されたり、下水溝がセメントで固められたりしているのは羨ましいが、自分の家の造りも

勝手にできないようなところに住むのは願い下げだと、みなで頷き合って終わるのである。

哀牢山脈のハニ族居住地域全体で現在進みつつある村落観光開発は、詳しくは後述するとおり、ディテールこそともかく大枠としては、世界遺産委員会での方針と歩調を合わせるかたちで行われている。ところがそれを通じて出現しつつある村落景観は、先に紹介したように、T村に暮すハニ族の目には幾分奇妙な姿に映っているようである。観光化によって現地の文脈から逸脱した景観が新たにつくられるということ自体は、別段おかしいことではない。では、紅河ハニ棚田の世界遺産登録を契機として進みつつある観光開発は、T村の人々が考えるような経済的利益を想像させる資源である以外に、何か別の意味を持ちうるのだろうか。続いては、今回の世界遺産登録をめぐる中国とユネスコのあいだで交わされたいくつかの文書をてがかりとして、「紅河ハニ棚田群の文化的景観」が具体的にどのようなものであり、それがどのような経緯のもとで描かれるにいたったのかを見ていきたい。

2 「文化的景観」とハニ族文化

2.1 世界遺産としての文化的景観

「紅河ハニ棚田群の文化的景観」の面積は16,603ヘクタール⁵⁾にもおよび、同じく中国の「福建土楼」や「天壇：北京の皇帝の廟壇」など特定の建造物を中心とする文化遺産とは違って、指定地域の景観そのものが登録資産とされている。その名称にもある「文化的景観」とは、1992年以降に世界遺産選定の指針として使われるようになった概念であり、簡潔に示せば「自然と人間との共同作品」を指すとされる [文化庁 online: world/h_13_2A.html]。では、紅河ハニ棚田の文化的景観とは具体的にどのようなもので、そこでハニ族の文化はどのように描かれているのであろうか。ここでは、関連する文書のうちユネスコ側の認識をもっとも詳細にあらわしていると考えられる、イコモス (ICOMOS: International Council of Monuments and Sites) が紅河ハニ棚田について策定した評価書について瞥見したい。

まず紅河ハニ棚田の文化的景観について、それは森林、水系と灌漑水路、村落、棚田および農耕実践、そして米作りに関連する伝統的習慣、の五つの要素から構成される⁶⁾とある (写真4～7参照)。視覚的な景観としては、棚田の壮大さとならんで村落景観についての言及が多く、とくにキノコ型の外観をした茅葺き屋根の家屋と儀礼用の広場がクローズアップされている。これら5つの要素が密接に結びついて景観全体をなしていることも強調されており、とりわけ森林・水路、村落、棚田からなる物理的景観と、ハニ族の文化的実践が相互に支え合っていることが繰り返し述べられている。



写真4 棚田の眺望



写真5 アイツン村の森林



写真6 灌漑水路



写真7 ハニの村落と家屋の眺望

※写真4～7は、イコモス評価書 (Evaluations of Nominations of Cultural and Mixed Properties) からの抜粋。キャプションは評価書記載の英語より筆者が訳出した。

私見を述べれば、評価書の記述全体が牧歌的な色調でまとめられており、人と自然が調和した（ハニ族ではない誰かにとっての）失われたしまったよき時代を蘇らせているかのような印象である。たとえば、「人と自然の調和は彼らの思考、行動、生活を支えている。彼らは太陽、月、山、河、森や火などの自然現象を崇拝する」という文言について、まず許容度をかなり広げたとしても「自然」に相当するハニ語の概念はないように思うし、やや近い「ソト (*laqnit*)」という言葉には危険で近寄りがたい場所という含意がある。さまざまな自然現象も崇拝の対象というよりは、害を及ぼさないよう宥めておくために犠牲を捧げることがあるといったほうが近いだろう。また、先に述べた茅葺き屋根の家屋は伝統的な村落景観を視覚的に表現する建築物として何度も登場し、その保全のための方法についての提案までなされているが、茅葺き屋根の家屋は同地域で一旦はほぼ淘汰されてしまっていたのが実情であり、ごく一部の村で観光利用の文脈のもと装いだけ整えた家屋がみられるに過ぎない。

なかば空想的ともいえる民族表象が書類の中の問題にとどまるのであればよいが、先述のように、こうした記述をなぞって進められる観光開発の影響は日々拡大し続けてい

る。続いては、紅河ハニ棚田の世界遺産登録までに中国側とユネスコ側のあいだで交わされた関連文書のやり取りを追い、上記のようなハニ族文化の表象がどのような駆け引きのもとで生じたのかを検討していく。

2.2 中国側の申請書策定

紅河ハニ棚田の世界遺産申請を目指す運動は、はやくも1990年代半ばにはじまっていたとされる。中国内での申請準備については、その最初期から中心人物として活躍した地元出身の研究者である史軍超みずから各所で語っており〔史 2000、2013など〕、日本語でも稲村務〔2014〕と孫潔〔2008〕、黄紹文〔2011: 97-101〕が詳しく紹介しているため、本稿では概略を述べるにとどめる。社会科学院所属の研究者であった史軍超は、1990年代後半より哀牢山脈の棚田を世界遺産にむけて申請すべく構想しており、彼の働きかけが功を奏して、2001年に紅河州人民政府に「紅河哈尼梯田申報世界遺産辦公室（紅河ハニ棚田の世界遺産申請に向けた専門事務局）」が設置されたことを皮切りに、政策的な整備が本格的に進められるようになった。ユネスコに提出することを念頭においた資料作成は、2001年に州レベルで開催された申請書作成のための予審会によって本格化し、以降数度の改訂が行われている。その後、2008年の世界遺産暫定リスト入りを経て、最終的に正式な登録推薦書（Nomination File）がユネスコ世界遺産センターによって受理されたのは、2012年1月20日であった。

このとき中国側は、275ページの本文と1,164ページにもおよぶ付録からなる大部の英文資料を提出している〔UNESCO online:/nominations/1111.pdf〕。それを約一年かけて精査したのは諮問機関であるイコモスであり、現地へ派遣した調査員の報告と、国際自然保護連合（IUCN: International Union for Conservation of Nature and Natural Resources）から受けた生態学的な助言を踏まえたうえで、およそ一年後の2013年3月にユネスコ世界遺産センターに提出する評価書をまとめている〔UNESCO online: 2013/whc13-37com-8B1inf-en.pdf〕。その後、世界遺産センターは紅河ハニ棚田の審査について決議案（draft Decision）と決議文（decision）を作成しているが、内容はいずれもイコモス評価書にある勧告（recommendation）をほぼそのまま転載したものである。以上の流れから、先に触れたような紅河ハニ棚田の文化的景観とは、中国側が提出した膨大な資料をもとに、イコモスが再解釈を施してつくりあげたものだと考えることができる。

ユネスコ側への最終的な申請窓口となった中国側の機関は国家文物局となっているが、紅河ハニ棚田の世界遺産申請にむけた政策整備や文書作成においてもっとも中心的な役割を果たしたのは紅河州建設局に設置された「紅河哈尼梯田申報世界遺産辦公室」であり、現地についての生態学的見解や、ハニ族についての人文科学ないし民族誌的資料を提出したのは、主に研究者を中心とした「紅河哈尼梯田申遺專家組」のメンバーであったと考えられる。この専門家グループには、グループ長の史軍超、副グループ長の李克

忠をはじめとして、李期博や李少軍など地元出身のハニ族知識人が名を連ねているが、彼らは1980～90年代のハニ族研究の一時代を率いてきた人物でもある。稲村務 [2005: 262; 2008: 128] が指摘するように、この時期の中国民族学では、各民族を特徴づける要素を探しつつ「中華民族」としての融和を強調することが責務であり、ハニ族の民族表象も型にはまった「風俗習慣」の記述や伝承や唱歌の漢語への翻訳が主流であった。最近10年ほどのハニ族研究では、民族学ないし人類学の専門的な訓練を受けた研究者がさまざまなアプローチを試みはじめているが、彼らの多くはまだ若手であり、国家的なプロジェクトに参加する機会を得ていない⁷⁾。ここで中国側の用意した資料の内容について詳しく触れる紙幅はないが、以上のような学術的・政治的背景から、そこに描かれたハニ族についての民族表象がどのようなものであるかを窺い知ることはできるであろう。ひとことでいえば、それは一昔前の中国民族学に戻ったかのような、平板かつ無時間的なものに終始してしまっているのである。

2.3 イコモス側の再解釈

イコモスは現地調査を行ってはいるが、民族学の専門調査員を派遣しておらず、調査期間も6日間と短かったことから、評価書作成にあたって参照した民族誌的資料は、ほぼ中国側が提出したものに限られると考えてよい。したがってひとまずは、先述したような現実とはかけ離れた紅河ハニ棚田の文化的景観は、すでに賞味期限切れとなりつつある中国民族学の作法にしたがって描かれたものだけということができる。しかしながら一方で、中国側はハニ族の文化について歌や踊りから祭礼まで百科総覧的に記述しているのに対して、イコモスは棚田を中心とする景観と伝統的慣習の結びつきをより強調しているという、両者の姿勢の違いもみてとれる。たとえば、中国側は文化的景観を構成するものとして「森林、水システム、村落、棚田群」という物理的な要素のみを挙げていたが、イコモスはこれらに「米作りに関連する伝統的慣習」を加えた5つを資産の構成要素として認めたとあって、「物理的な棚田が、何世紀にもわたって彼らの世界の基礎であり続けてきた強固で統合的な社会—経済—宗教的なシステムと関連しあっているという点で、ハニの棚田は評価されるべきである」[UNESCO online: 2013/whc13-37com-8B1inf-en.pdf: 78] との意見を述べている。いふならば、中国側の申請書では物理的な景観を支える背景として散りばめられていた文化的要素をまとめあげ、他の要素との結びつきを重視して資産へ格上げしているということであり、イコモスがハニ族の文化的側面とりわけ農耕実践に注視を向けていることが明らかであろう。

しかし、中国側が提出した資料を換骨奪胎して、物理的な景観と伝統システムが有機的に結びついていることを強調しようとするあまり、イコモスの評価書にはもとの資料を誤読しているきらいがある。たとえば、村落儀礼が共同体の結束を高めるということについて述べただけでは、肝心の儀礼の名称を取り違えてしまっている。さらには、

封建社会の残存として真っ向から否定されて久しい「土司制度」が、景観の維持を担う伝統的な管理システムとして現在でも機能しているかのような記述まであり、これはまったくの誤認というほかない。イコモスは、人と自然が一体となった予定調和的な景観を追い求めるあまり、やや時代錯感のあった中国民族学的な記述に輪をかけて、さらに現実離れた文化像をつくりあげてしまったといえるのではないだろうか。

2.4 観光開発のゆくえ

以上にみてきたような駆け引きのもとでつくりあげられてきた紅河ハニ棚田の文化的景観は、いまや各国語に翻訳され、際限なく拡散され続けている。ガイドブック『地球の歩き方』[地球の歩き方編集室 2011: 245]には、棚田の観光ルート沿いにある観光村について「古くからこの地に伝わる村落、林、棚田、灌漑システムを見ることができる」という解説が載せられ、雲南の省府である昆明の空港に降りたてば、まさにそのような美しい風景とニッコリほほ笑む民族衣装の女性を映した大きなパネルが、まっさきに旅行者を出迎えてくれる。さらに、事態はもはや単にイメージだけが羽を広げて流布しているだけにとどまらず、その期待を裏切らない物理的な景観が、現地でも急ピッチで仕立て上げられつつある。中国の研究者や為政者が思い描き、ユネスコが世界遺産という冠を与えた文化的景観は、いまや手厚い制度的管理と保護の対象となることによって、現地において巨額の投資のもと視覚的に実体化されつつあるのである。

紅河ハニ棚田の世界遺産登録に際して、世界遺産センターは中国側への追加勧告として、将来的にはエコツーリズム戦略と解説戦略 (interpretive strategy) を強化していくべきだという旨の申し送りを行っている。後者の解説戦略とは、「複雑な農耕と水管理のシステム、およびハニ族の共同体に特徴的な社会—経済—宗教的なシステムについて理解を広めるため」の施策であり、具体的には上述の経緯で描かれた半ば空想的なハニ族の文化を、訪問者にむけて発信していくことである。中国側でもそれに否はないようで、現在のところはこの指針におおむね沿うかたちでの観光開発が進んでいる。世界遺産の指定地域内では、インフラ整備を施したハニ族の〈民俗村〉と写真撮影のための眺望台をめぐる周遊ルートを設定し、一律の入域料を徴収するシステムが、地元県政府と観光開発を手掛ける私営企業の主導のもとですでに完成している。観光路線沿いの村落では政府からの援助によって茅葺き屋根の伝統家屋や水車小屋といった、世界遺産としての文化的景観が描き出す伝統的村落景観が次々と再現されている。こうした〈民族風情〉を前面に打ち出した村落観光開発の勢いは、既存の村落の外観に手を加えるだけにとどまらず、「もっとも色濃くハニ族の伝統を表現する」村落を新たに建設するというところまで徹底している。たとえば、総額2億元にのぼる予算のもとに、もともと田畑だった一帯を接収して建設が進みつつある〈哈尼小鎮〉には、ハニ族の村落というよりもヨーロッパの片田舎を想起させるような街並みが「再現」され、さらに文化展覧館やコンサ

ートホール、映写館までを備えた一大村落型観光施設が目指されている。



写真8 観光村落〈哈尼小鎮〉

ここで、本稿の前半で紹介したひと場面を振り返ってみたい。当時わたしが滞在していたのは元陽県に隣接する紅河県であったが、そこでも似たような村落景観を再現するかたちでの観光開発が行われていた。こうした手が加えられた村落に対してわたしの知る人々は、旅行客の落とすお金や、村道や下水溝の改善など生活に直結する部分には関心を寄せる一方で、伝統的村落景観の構成要素として開発する側が注視する、茅葺き屋根の家屋や儀礼用の器具の展示については、ばかげていると一笑に付すのみだった。いうまでもないことだが、だからといって彼らがもっぱら生活レベルの向上や経済的な利益のみに関心を奪われ、自らの文化の価値に気付いていない、あるいは誇りを持っていないということではない。議論を先取りすれば、そこで起こっていることは、何をもって価値を認め、誇りをもって守っていくものとみなすかということについてのすれ違いなのである。この問題を論じるため、続いては「文化」という言葉をめぐる漢語とハニ語の翻訳作業について整理していきたい。

3 ハニ族による「文化」をめぐる語り

3.1 日常における翻訳のしくみ

まずは、登録決定まもなくの時点で示された世界遺産理解の一例を振り返ってみたい。「祖先の水田がきれいだ、ハニの“ヨリ”がよいと、外の外国人がそのように言っている (*aqpyuq aqbol e xaldei fuqzha, haqniq yolil meeq, laqnil e Waqgo col xilmei lei eil.*)」。

冒頭で紹介したように、これは紅河ハニ棚田の世界遺産登録のニュースを知ったわたしが、その事態を四苦八苦しながら解説した結果、その場で暫定的に成立した了解である。惜しむらくは酒宴の席でのこと、会話分析に耐えるほど細かいデータを示すことは

できないが、わたしの口をついて出た難解な漢語まじりの説明を、卓を囲むみなどで解釈したというものであった。たとえば、〈環境〉や〈景観〉は *xaldei* (水田) あるいは *fuqzha* (きれいだ) という言葉で、〈伝統〉は *aqpyuq aqbol* (祖先) という言葉で近似的に置き換えられることで納得されていった。しかし、このとき〈文化〉という漢語については、その場に居合わせた男の全員が知っており、即座に“ヨリ”というハニ語への翻訳がなされていた。

この両者の言い換えは、たとえば *culture* (英)、*kulter* (独)、文化 (日)、〈文化〉 (中) などを互換的に用いることとは意味合いが異なっている。中国において制度的学問やマス・メディアと結びついた「出版語」[アンダーソン 1997] としての地位にある漢語は、政治、経済、学術その他のあらゆる領域で、外部との討議が可能なように整備されてきた経緯を持っている。〈文化〉という語についても、外来の概念を漢字に鑄なおして旺盛にとり入れた中華民国時代に一般化したものであり、字義や語感に違いはあるものの、おおむね西洋近代起源の意味内容を共有しているといつてよい。漢語の世界において表象されてきたハニの〈文化〉が、書面のうえでの翻訳を経ただけで世界遺産委員会の人々に了解可能であったのも、〈文化〉と *culture* が共通の土台の上にあったからにほかならない。他方で、自前では表記法すら持たないハニ語はあくまで民族内でのみ通用する生活言語であり、いうまでもなく外の言語との対話のための備えが制度的に行われてきたわけではない。したがって、世界遺産に関連するような抽象度の高い漢語が、その場でアドホックに身近なハニ語へと置き換えられていくのも、ごく自然なプロセスだと考えるべきであろう。

ハニ族が日常において行う翻訳作業とは、このように漢語的世界を生活実感に寄り添うかたちに換骨奪胎して了解していくための作業なのであり、それぞれの語彙が備える意味を正確に解釈しようという意図のもと行われるものではない。たとえば冒頭で紹介した議論において、〈伝統〉という語彙は *aqpyuq aqbol* (祖先) という身近な言葉にたどり着くための記号としての役割を果たしていたに過ぎず、酒席に加わっていた男たちがその場で「伝統」という漢語の原義を理解したとは言い難い。いうまでもなく、別の文脈のなかで漢語が流暢なハニ族に *aqpyuq aqbol* とは何かと問うたとしても、単に〈老祖公〉(祖先) という答えが返ってくるだけであろう。〈文化〉は〈景観〉や〈伝統〉などと比べればよほど馴染みのある漢語であるため、上述の場でも即座に翻訳がなされていたが、やはりそれは“ヨリ”としての了解を導く記号に過ぎないのであって、実際に〈文化〉とは何かという問いには、ほとんどの場合“ヨリ”だという以上の答えは返ってこない。このように、いまや世界遺産として認められたハニ族の〈文化〉と、ハニ語での会話において納得される“ヨリ”は、含意されるリアリティにおいて一致するものではないのである。

3.2 “ヨリ” — 文化的なるもの

タイ北部で半生を過ごした宣教師であり、アカ族（中国の民族政策上はハニ族の「支系」とされる）についての民族誌的研究でも知られるポール・ルイスと、中国側のハニ族知識人である白碧波の共編による英語-ハニ語辞書によれば、“ヨリ”の項⁸⁾には rule, custom および to be polite (follow the customs) という訳があてられており、英語の culture は項として設けられていない [Lewis and Bai: 532; 617]。ひとまずはこの規則、慣習、そして礼儀正しくするという訳語を念頭に置きつつ、さらに日常的な文脈において“ヨリ”とはどのように語られるものなのかを見ていきたい。

この村に住み始めた頃、わたしはしばしば“ヨリ”については“モビ”に聞くべきだという助言を受けていた。“モビ”とは世帯レベルの儀礼に長じた男性であり、その手順と詠唱文を間違わずに遂行できると信頼されている人物である。その詠唱文は祖先 (*Aqpyuq aqbol*) から口承されてきたとされ、この助言があらわしているように、そこに“ヨリ”が詰まっているという感覚がある。そこでの“ヨリ”とは、昔から伝わる作法といった意味が濃く、祖先供養のやり方や、親族との付き合い方などがイメージされるものである。また、子供のしつけに際しても“ヨリ”として言及されることが多い。小さな子供は毎日のように近所の家でお菓子をねだってまわるが、飴玉や小遣いを受け取るときに、まわりの大人が「両手（を差し出しなさい）! (*Alavq niq mol.*)」と声をかけている姿はよく見かける。物心がつく年頃の子にはさらに、そこにいる大人たちに親族名称で呼びかけるよう指示を飛ばし、親戚の顔を覚えさせようとする。そうした場面では、「“ヨリ”を教えている (*Yolil meiq.*)」のだと語られることがあり、“ヨリ”が祖先から継承され、さらに今後も受け継がれていくべきものだと考えられていることが分かる。

ただし、“ヨリ”についてはその不変性が強調されるばかりではない。たとえば、どんなに声望のある“モビ”であったとしても、「1人で“ヨリ”をすべて知りつくすことはできない (*Tiqhhaq nei yolil saqli ma hel sa qiv.*)」という定型句があるとおり、“ヨリ”のあり方は1つだけではなく、さまざまなバリエーションがあり得るという見方も成り立っているのである。囲炉裏の火の始末や竹ひごの作り方まで、日常的な所作に関する“ヨリ”については、何が正しいのかについてしばしば議論がたたかわされるが、皆が納得する答えが出ることはほとんどない。また、「祖先の“ヨリ”」と「現代の“ヨリ”」という対比も、よく耳にする言い方である。たとえば、祖先供養の際に供物として用いないことから、祖先の時代にはタバコがなかったのだという認識がある一方で、村の男たちが集まる場でタバコを勧めるとき、相手との親族関係や世代などを読み解いて正しい順序で配ることができないと、“ヨリ”を分かっているという烙印を押されてしまう。人々は、「祖先の“ヨリ”」と現在の“ヨリ”が同じではない (*Aqpyuq aqbol e yolil lo niao'aol e yolil tiq qaq ma pol.*)」という認識を当たり前のこととして受け入れており、タバコの配り方のような「現在の“ヨリ”」が「祖先の“ヨリ”」に比べてとりたてて劣っているという

主張も聞いたことがない。

このように、“ヨリ”は祖先とのつながりを感じさせ、今後も受け継いでいくべきだという価値が認められている一方で、単調な懐古主義や画一化とも遠いところにある。そこには、現在進みつつある文化的景観の保存という試みとは、どうにも相容れない部分があるのではないだろうか。この村では30数年前に村が全焼する大火事があったが、ちょうど観光開発の文脈でリバイバルが進みつつあるような茅葺き屋根の家屋が多かったために、火の回りがすさまじく手の施しようがなかった。このため、村を再建するときには共同で屋根用のスレート板を購入し、茅葺き屋根をやめるようとりきめをしたのだという。時代とともに家屋の素材も形態も変わっていることは確かだが、それによって“ヨリ”が捨て去られたというわけではなさそうである。この数年では、棚田の底土を固めた日干しレンガの壁にセメントを内張りしたり、一部を取り壊して焼きレンガ造りに改装したりと家屋の改装が流行しているが、いざとりかかってみると、起工と落成の儀礼と直会の段取りや、工期中に祖先を祀る壇を安置しておく方法など、関連する“ヨリ”は数多く出てくるのである [c.f. 清水 2005: 310-335]。

“ヨリ”として語られる範疇と〈文化〉のそれが完全に重なることはないにせよ、ハニ族が継承していくべき自らの実践を名指すイデオロギイをもっていることは明らかであろう。しかし、現在の学術的、政治的な状況に鑑みる限り、それが漢語を中心として展開される言説のアリーナへとぼる道筋は、これまでのところ用意されてこなかった。一方では、冒頭で紹介したように、そもそも「外の外国人 (*laqnil e Waqgo col*)」が持ち込んできた世界遺産という運動が、哀牢山脈一帯のハニ族の日常にまで波及しつつあるという現実がある。いまや、外の人間がどのようにしてハニ族の文化を語るかが、他人事では済まされない影響をもち始めているのである。

4 おわりに

「紅河ハニ棚田群の文化的景観」においては、資産を構成する一部としてハニ族の文化が強調されており、現地では手厚い管理と保護の制度のもと、ハニ族の伝統を体現する村落景観の再建が着々と進み、文化展示のための施設も建設が続いている。しかし、この状況を横目にみながら暮らすハニ族にとって、観光開発と文化保護の文脈において再現された景観は、必ずしも自分たちの文化的なアイデンティティを満足させるものではないようであった。

その理由の一端は、地域住民の生活実践をも含むものとしての景観を固定的に描き出そうとすれば、形骸化は避けられないということそのものにあるだろう。ユネスコはこのことへの反省から2000年代に入って無形文化遺産事業を推進しており、中国政府もこれに同調して「非物質遺産」関連の制度をつくりあげている。にもかかわらず、本稿で

行った一連の手続きの分析からは、政治的駆け引きの産物として現実味の薄いハニ族の文化像をまかりとおしてしまう仕組みが透けてみえてきた。ハニ族が“ヨリ”という言葉で語る自画像は、そうした固定化された文化的景観のなかには収まりそうにない。保護を第一義におく世界遺産の制度的限界を意識しつつ、そこから生じる齟齬をローカルな視点から読み解いていく、それは世界遺産を人類学者が論じていくにあたっての中心的課題のひとつとなる。

本稿ではこの課題にむけた試みとして、世界遺産登録によってますます量産されるようになった「外部」からの文化表象と、ハニ族自身の「内部」における“ヨリ”をめぐる語りとの差異について検討した。ただし、より重要なのは外と内の論理を区切って対置することそのものではなく、両者がどのように接点をつくりあげていくのかを検証していくことである。すでに述べたように、ハニ族のみが暮らす村落でも漢語概念の受容と翻訳は日常的なものとして行われている。漢語で表象されるハニ族の〈文化〉にまつわる諸観念が、ハニ族のローカルな語りの場面においてどのように内在化されていくのか、まずはそのプロセスを今後見極めていく必要がある。

また一方では、“ヨリ”のような自民族の言葉で語った自画像が、今度こそ文化政治のどこかに居場所を確保できるのではないかという可能性を論じることにも意義がある。振り返ってみれば、中国における文化表象、とりわけ少数民族にまつわるそれは、民族識別や文化大革命といった政治的状況に左右されながら目まぐるしく変わり続けてきたのであり、時代に応じた筆致が現実を強く規定してきたという歴史がある [稲村 2005: 260]。現在生じつつある文法の変化も、ひとまずそうしたバリエーションのひとつとして比較するならば、メディアを通じた圧倒的な浸透力の強さと併せて、これまでにない多声性が際立つ。本稿でみてきた中国政府とユネスコの駆け引きも、文化表象をめぐる交渉の場が開かれていることを示しているだろう。近年の中国では、あくまで観光開発が最優先されるという条件付きではあるものの、ユネスコの世界遺産および無形文化遺産事業と足並みを揃えるようなかたちで文化行政にまつわる法制度が整えられつつある。世界遺産としての棚田景観をつくりあげてきた主体を「ハニ」として名指している以上、彼らが語る言葉が文化政治の舞台へと引き上げられていく余地は十分にあると考えられる。

少なくとも紅河南岸のハニ族の今後を考えるにあたって、世界遺産をめぐる文化行政と文化の資源化が、正面から取り組んでいかねばならない課題であることは間違いない。

注

- 1) 世界遺産登録物件の名称は英語、フランス語のみで発表されるため、厳密に言えば日本語での正式名称は存在しない。ここでは、日本ユネスコ協会連盟のHPでの記載を採用して「紅河ハ

ニ棚田群の文化的景観」とした。本稿では「紅河ハニ棚田」と略記する。

- 2) 本稿では、とくに漢語(中国語)の表現であることを示す必要がある場合、三角カッコで括り(〇〇)のように表記する。ただし中国本土で使われている簡体字ではなく、日本語のフォントを用いる。
- 3) 調査村のおおまかな言語使用状況については、日常生活にはほぼハニ語のみが用いられており、おおむね30代以上の女性には漢語がほとんど分からない人も少なくないが、男性の大部分と若年層の女性は、程度の差はあれ雲南方言の漢語を話すことができるとみてよい。なお、周囲に他民族の村はないため、ハニ語と漢語を除く言葉を話せるものはいない。
- 4) アルファベットで示したハニ語は、酒に興が乗ってたたかわされた話の顛末を、その場でわたしが一文にまとめて書きつけたものである。なお、「外の外国人」“*laqnil e Waqgo col*”のうち「外国人」にあたる“*Waqgo*”は、漢語の現地での訛り音をハニ文表記にしたがって転写したものである。ハニ文表記については、イタリック体のアルファベットを用いて行う。ハニ語のアルファベット転写については紅河州緑春方言に準じて中国の言語学者によって作成された正書法〔戴、段 1995; Lewis and Bai (eds.) 1996〕をもとに、話者による発音をその都度書きおこしたものを記載する。なお、文章の読みやすさを優先してアルファベット転写ではなくカタカナを用いることもあるが、その場合には“ ”で括り、“〇〇”のように表記する。
- 5) これは指定地域のみ面積であり、その周囲に緩衝地帯(バッファゾーン)として29,501ヘクタールが設定されている。
- 6) 資産を構成する5つの要素について、原文では以下の通りである。“Forest, Water and irrigation channels(ditches), Villages, Terraces & farming practices, Traditional customs related to rice cultivation.”
- 7) 民族学の専門教育を受け、現在活躍の幅を広げつつある若手から中堅の研究者としては、雲南大学の馬獅炜と白永芳、雲南民族大学の王建華、紅河学院の徐義強、蘆鵬らの名前が挙げられる。
- 8) 本稿では「ヨリ」のハニ語文を現地での発音に近づけるため *yolil* と表記しているが、ポール・ルイスと白碧波の辞書での綴りは *yoliq* となっている。なお、前者は2音節目が高調、後者は2音節目が低調をあらわしており、声調が異なる。

参考文献

●日本語文献

アンダーソン、ベネディクト

1997 『想像の共同体—ナショナリズムの起原と流行』(白石さや・白石隆訳) 東京: NTT出版。

稲村 務

2005 「ハニ族『文化』の政治学」長谷川清、塚田誠之編『中国の民族表象』、pp.259-275、東京: 風響社。

2008 「ハニ語と中国語の間」塚田誠之編『民族表象のポリティクス—中国南部における人類学・歴史学的研究』、pp.127-152、東京: 風響社。

2014 「中国紅河ハニ棚田の世界文化景観遺産登録からみる「文化的景観」と「風景」」『地理歴史人類学論集 琉球大学法学部紀要人間科学別冊』5号: 23-96。

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌—北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』 東京: 風響社。

「地球の歩き方」編集室

- 2011 『地球の歩き方 D06 成都 九寨溝 麗江 2012～2013年版』東京：ダイヤモンド・ビッグ社。
黄紹文（稲村務訳）
- 2010 (2007) 「ハニ族の棚田——千年の労作から世界文化遺産候補への変遷」『地理歴史人類学論集 琉球大学法学部紀要人間科学別冊』2号：57-105、(原著：「哈尼梯田：千年労作対象
到世界遺産的嬗变」『諾瑪阿美到哀牢山——哈尼族文化地理研究』、pp.119-188、昆明：云南
民族出版社。)

● 英語文献

Lewis, P. and Bai Bibo (eds.)

1996 *Hani-English/ English-Hani Dictionary. Hanqniqdoq Yilyudoq daoqlo-soqdaoq.* IIAS.

● 中国語文献

戴慶厦、段凱樂

1995 『哈尼語概論』雲南民族出版社。

史軍超

2000 「關於建立雲南省申報世界遺產戰略的建議和構想」『雲南民族學院學報（哲學社會科學版）』
06期：45-49。

2013 「世界人的哈尼梯田」『雲南畫報』04期：12。

● インターネット資料

文化庁

「世界遺産条約履行のための作業指針 II 世界遺産条約一覧表 II. A 世界遺産の定義文化庁
仮訳」

http://bunka.nii.ac.jp/world/h_13_2A.html (2014/01/10 最終アクセス)

外務省

「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/pdfs/B-H4-0241.pdf>

UNESCO

Cultural Landscape of Honghe Hani Rice Terraces Nomination file.

<http://whc.unesco.org/uploads/nominations/1111.pdf>

Evaluations of Nominations of Cultural and Mixed Properties.

whc.unesco.org/archive/2013/whc13-37com-8B1inf-en.pdf